

## 平成29年度 熊本県近代文化功労者の決定

熊本県教育委員会は本年度の熊本県近代文化功労者を次の3名（現存者1名・故人2名）に決定し、以下のとおり顕彰式を開催します。

### 〔1 顕彰者〕

ふじま ふじさい 藤間 富士齋（芸術） たかはし 本名：高橋 ルミ 昭和9年生（満83歳）

熊本市出身。約80年間にわたって日本舞踊に関わり、門弟の指導育成に心血を注ぐ。県内外はもとより海外において多数公演を行う。氏の振付した「山鹿灯籠踊り」は、全国的にも知られている。熊本県日本舞踊協会理事長などの役職を務め、日本舞踊の継承・普及・発展に貢献している。

ほそかわ もりひさ 細川 護久（教育） 故人 明治26年没（享年54歳）

熊本市出身。明治3年に熊本知藩事に就任。熊本洋学校及び古城医学校を設立し、外国人教師ジェーンズとマンズフェルトを招聘する。両学校からは、文豪徳富蘇峰や世界的な医学・細菌学者の北里柴三郎など優れた人物が巣立っている。これらの明治黎明期における熊本の教育の発展に尽力した。

やまきた さち 山北 幸（社会） 故人 平成25年没（享年99歳）

湯前町出身。戦後間もない地域の農村において下村婦人会を発足させる。そこで「市房漬」を考案し、無添加の農産加工品の製造と販売を手掛ける。また、婦人会の活動を通し女性の地位向上に努めた。「地域」「食」「女性」の分野を牽引した氏の遺志は現在も地域や下村婦人会に受け継がれている。

### 〔2 顕彰式〕

日時：平成29年10月28日（土）13時00分～13時45分

会場：熊本県庁地下大会議室

※平成30年3月に顕彰者の功績集を発行する予定

### 参考

- 本県出身者又は在住者（故人を含む）で、教育・学術・芸術・宗教・産業等あらゆる分野で近代文化の発展に貢献し、その功績が顕著である方を熊本県近代文化功労者として顕彰している。
- 昭和23年度の第1回から本年度で67回目を迎える。これまでの顕彰者の累計は今回の3名を含めて289名に及び、本県内の顕彰制度としては、最も古い歴史と権威を誇る。
- この顕彰事業の目的は、社会の発展に尽くした郷土の先人達の功績について、広く県民の方々に紹介し、このような先人の生き方を通して青少年の健全育成を図ることにある。

問い合わせ先  
熊本県教育庁教育総務局文化課  
担当：内堀（うちほり）・青瀨（あおはま）  
直通 096-333-2704 FAX 096-384-7220



(写真は本人提供)

ふじま 藤間 富士齋 (芸術) 現存者

昭和9年(1934年)9月7日 生  
(満83歳)

藤間氏は、熊本市に生まれ、熊本の日本舞踊界の草分けである初代藤間勤太女<sup>かんため</sup>の後継者として、幼少の頃から厳しい稽古に励み13歳で名取となった。その後、熊本で藤豊会<sup>とうほう</sup>を主宰し門弟の指導育成に当たっている。

氏は熊本の風土や歴史を素材とした創作舞踊に意欲的に取り組み、氏の振付した「山鹿灯籠踊り」による千人灯籠踊りは、熊本の夏の風物詩として全国的に知られている。さらに、平成5年に熊本県立劇場で上演されたオペラ「細川ガラシャ」の日本舞踊振付を手掛けるなど、本県の日本舞踊界の第一人者として活躍している。

また、氏は熊本で藤豊会の公演を毎年開催し、東京においても公演を主催している。さらに、欧米や中国での海外公演にも参加するなど、県内外のみならず、海外にまでその活動の範囲を広げ活躍している。

氏は、公益社団法人日本舞踊協会熊本県支部長、熊本県日本舞踊協会理事長として、流派を超えて本県の日本舞踊界を強く結束させ、本県の伝統文化の振興・発展に大きく貢献している。

- |              |                       |
|--------------|-----------------------|
| 1937年(昭和12年) | 藤間流に入門し、初代藤間勤太女に師事    |
| 1948年(昭和23年) | 藤豊会を主宰                |
| 1967年(昭和42年) | 東京に舞踊研究所を開設           |
| 1984年(昭和59年) | 熊本市姉妹都市文化交流で中国桂林公演に出演 |
| 1997年(平成9年)  | 東京国立劇場にて藤豊会の主催公演      |
| 2002年(平成14年) | くまもと県民文化賞特別賞受賞        |
| 2003年(平成15年) | 地域文化功労者文部科学大臣賞受賞      |



ほそかわ もりひさ  
細川 護久 (教育) 故人

天保10年(1839年)3月1日 生  
明治26年(1893年)9月1日 没  
(享年54歳)

(肖像画は永青文庫提供)

細川護久氏は第10第肥後熊本藩主細川<sup>なりもり</sup>齊護の三男として熊本市に生まれる。藩主を受け継いだ次兄<sup>よしくに</sup>韶邦の名代として朝廷や幕府首脳と関わり、明治新政府においては<sup>ぎじょう</sup>議定、刑法事務総督、参与を歴任し、明治3年に熊本知藩事に就任する。

知藩事<sup>ちはんじ</sup>就任後、氏は開国後の日本の新しい時代を見据え、熊本洋学校を設立し、アメリカ人のジェーンズを教師として熊本に招聘した。熊本洋学校への官費の補助の打ち切り後は、私財を投じて学校の運営を継続した。熊本洋学校では約200名の生徒が学び、後の文豪徳富蘇峰や同志社大学2代目総長の小崎弘道など、多くの優れた人材を輩出した。

さらに、氏が熊本洋学校と並んで設立した古城医学校には、オランダ人医師マンズフェルトを招聘し、3年間で132名の生徒が学んだ。その中から、世界的な医学・細菌学者の北里柴三郎、東京医科大学の学長となった緒方正規、浜田玄達など後の日本の医学界に大きな足跡を残す人物が巣立った。

このように、明治初期における日本の教育の基礎を築き、近代日本の発展に貢献する人材育成の礎を築いた氏の功績は大きい。

- |             |   |
|-------------|---|
| 1868年(慶応4年) | 政府議定に就任<br>刑法事務総督に任命される                                     |
| 1896年(明治2年) | 政府参与に任命される  |
| 1870年(明治3年) | 熊本知藩事に就任  |
| 1871年(明治4年) | 廃藩置県で藩知事免官、熊本県令となる<br>熊本洋学校、古城医学校を設立<br>ジェーンズ、マンズフェルトの招聘を行う |



やまきた さち  
山北 幸 (社会) 故人

大正2年(1913年)11月21日 生  
平成25年(2013年)2月11日 没  
(享年99歳)

(写真は下村婦人会提供)

山北氏は、父・井上<sup>ともみさ</sup>朋房、母・トモエの長女として湯前町に生まれる。現県立人吉高等学校卒業後、夫の病院を手伝う傍ら戦後の貧窮する地方の農村において<sup>しもむら</sup>下村婦人会を発足させる。

氏を中心とした下村婦人は、試行錯誤の末、手作りの味噌、醤油、漬物の製造、販売を始めた。その中でも「市房漬」<sup>いちみさづけ</sup>は、収量増で余った野菜を活用したもので、無添加の素朴な自然食品として評判となり、県内外の新聞や雑誌『暮らしの手帖』で大きく取り上げられた。今日も全国の多くの家庭で食されている。こうした取り組みは、栽培から加工・販売までをすべて一貫して行う「六次産業化」の先駆けとして高い評価を受け、地域の女性が収入を得る機会となった。

このような氏の活動は、婦人会の活動を通して女性の地位向上を目指したことでも、全国から注目を集めた。94歳で下村婦人会の代理理事を退任するまで第一線で活躍し、「地域」、「女性」、「食」のあるべき姿を牽引した氏の功績は大きい。

下村婦人会では現在も氏の意志を受け継ぎ、漬物等の製品を通して日本の食文化のすばらしさを全国に情報発信している。

- |              |                                     |
|--------------|-------------------------------------|
| 1931年(昭和6年)  | 県立人吉高等女学校研究科修了                      |
| 1950年(昭和25年) | 下村婦人会を発足                            |
| 1964年(昭和39年) | 「市房漬」の商標登録出願                        |
| 1971年(昭和46年) | 熊本市内百貨店にて常設販売開始                     |
| 1983年(昭和58年) | 第22回全国郷土特産展(東京)に参加                  |
| 1996年(平成8年)  | 「山北幸と下村婦人会」が国土庁長官賞受賞                |
| 2000年(平成12年) | 第23回信友社受賞(長年にわたる地域婦人会リーダーとしての功績を評価) |
| 2007年(平成19年) | 下村婦人会市房漬加工組合代表理事退任                  |